

新刊紹介

リヒアルト
クローナーヘーゲルの哲學

岩崎
大江精志 郎 勉 共譯

あらゆる哲學者の中でヘーゲルほど生存中その哲學を絶対に支持され、死後あれほどの分裂と對立の中に碎散つたものもあるまい、老いたるヘーゲルは或日講義に出る時泥濘の中に失つた靴に氣づかすして裸足の左足をもつて講壇に上つたと云はれる。學者の放心もさる事ながら、講壇にもつて行かなかつたその片足の靴こそ今世界を馳けめぐつてゐるとも云へるであらう。

ヘーゲルの講壇にもつて行つた右足の靴をもし求めるとするならば獨逸ではローゼンクランツ、エルドマン、クローノフイシャ、ホルランド、ラッソン、コーンを擧げることができであらう。英國ではステイアリング、バイリー、ウォレス、アラッドレーを擧げることができであらう。その右足の靴ではあれ寧ろその批判者として、歴史的立場よりするテイルタイ、ヘーリンク、ロイス、汎論理主義よりするラスク、トレレンブルク、存在論よりするキルクゴール、ハイテッカー等を私等はもつてあらう。クローナーの位置はこれ等に對して、クロックナー、ハルトマンと並んでヘーゲル復興の闘士としてその姿を浮彫づけるであらう。

ヘーゲルの講壇にもち行かなかつた泥濘の中に残されし左足の

靴は彼のシステムに對立する辨證法的方法より出發して、シュートラウス、アルノーバウエル、ルーゲ、フオイエルパッハを経て更にフオーグト、ブエヒナー等の唯物論と結んでマルクス、エンゲルスの踵にかけられる。この二人の足跡はコルシュ、アドラー的のびる方向と、マツハ、ボグダノフ、ルナチャルスキーの如く修正派としてのびる方向をもつものと、正統派としてのアレハノフ、レーニン、デボーリン、タルハイマー、スターリン、アダルスキー、カルレフ、ルダス、等の方向にのびるものとに別たれる。

一人の人の學說として、かくも遙かに遠き對立にまで導かれし學說は外に類例を見ないであらう。正しく彼の辨證法の學說そのものがそれに反對さる、事によつて、辨證法的に生きつゞけて來たとも考へらるゝであらう。

こゝに譯出されしクローナーの von Kunt bis Hegel は問題史的體系的ヘーゲル研究として非常に要領よく要約されてゐるものである。多少批判的ではあるが、カントよりヘーゲルへの獨逸觀念論を忠實に辿つて行つてゐる。故に舊ヘーゲル主義者に比較的忠實でありながら、しかも新しきヘーゲル解釋の光の下に問題をとらへつゝあるところにこの書の使命がある様である。故に新ヘーゲル主義者は彼の起伏多き大系を迷ふにあたつて必ずや一度眼を通すべきベテカである事を信する。

しかしこの書は原名が「カントよりヘーゲルへ」であるごとく、正しくカントよりヘーゲルを出てはゐない。「ヘーゲルより現代へ」ではないことは讀者の忘れてならない事である。一方テイル

タイより初まれる歴史的生成的研究はこゝでは顧られてはゐない
いはんや實踐ヘーゲルに至つては尙更である。

ベテカを手にしたものは必ずやその山河の起伏の中に花と果實
の香を想像をもつて満たすであらう。この書は正にこの華やかな
想像に對して自由を與へてゐると思はれる。この書の一部第二卷
の後半の邦譯の今こゝに出でし事をこゝに諸彦と共に喜び譯者の
勞を多とするものである。尙その完譯の出でん事を併せて祈るも
のである。(中井)(理想社發行、貳圓八拾錢)

宗教の史實と理論

宇野圓空著

本書は我國現代著名の宗教學者東京帝國大學助教授宇野圓空氏
が過去二十餘年に亘りて研究の中に、時にふれて發表せられたる
論文を巧に系統づけて編み上げたものである。其の序文にもこ
とわつてある通り古きは大正元年に新らしきは昭和五年に書かれ
しものを、又雜誌に新聞に載せられたるものであるから筆致必ず
しも一貫してゐるとはいへぬし、始めより篇を起して目論見を立
てたものでないだけに夫れ夫れの時期に部分的に扱はれた問題の
集成ではあるが、よく之れに筆を補してずつと一致した一卷にま
とめられてある。

本書は前後二篇に分ち、前篇に收むる所は十一章で(1)宗教の形
態と本質、(2)宗教と科學との對立、(3)宗教學と宗教哲學、(4)宗教
民族學の興起、(5)宗教現象學の一形式、(6)神聖の意識とその内容
(7)宗教的情操の内容及基礎、(8)信念の心理學的特徵、(9)宗教に

於ける人格的態度、(10)宗教的欲求の理論、(11)宗教的集團に於ける
感情に分たれてある。これを出來るだけ宗教民族學の傾向を以て
終始説明せんとの心持が動いてゐる。論文は種々の學說の紹介
や批評があるが、宗教學の研究方法は其の研究の大部分を所謂宗
教心理學に負うてゐるけれども、人間生活の宗教現象につきての
一考察をなすべき一方法にすぎない。又宗教の本質と表現と活動
とを説明する目的のためには、宗教史上の事實の比較的總合的研
究たる比較宗教學から出發するだけによりても満足でない。宗教
史と共に宗教心理學の研究の一役が夫れに働いてこれ等の供給す
る事實を材料として宗教其ものの統一の説明をなさねばならぬ。

そこに普遍的法則の發見を促さればならぬ。さりながら宗教は一
つの原理をもつて總てに押しすゝめて考へられぬ。即ち宗教の諸
形態を認めて集團の變遷や教義の解釋を以てのみ動かさるべきで
なく、此等の集團や個人の宗教的機能の研究する必要がある。つま
り祭祀や禮拜等の普通の宗教的行動でも、他の生活現象や動機が
行はれるから、道德政治經濟等の活動との相互作用に着目しつゝ、
此れに宗教的態度や調子を與へるべきが宗教の存在である。もし
斯様な有様だとすれば、社會生活に於ける宗教が他の要素と相關
聯して見るには原始生活の方が文化が十分でないだけに都合がよ
い。高等宗教をみるには原始宗教の狀態と比較しなければならぬ
である。現今はすでに高等宗教は相當充實して居るに拘はらず原
始宗教の事實はまだまだ開拓さるべき領域が多い。民族學的研究